

大学生の友人関係における私的自意識と同調と 心理的居場所感との関連

○山本 千佑里

(広島国際大学大学院心理科学研究科)

目的

本研究では、大学生の友人関係における私的自意識と同調と心理的居場所感との関連について検討する。仮説は以下の3つである。1. 私的自意識が高い人は、低い人に比べて心理的居場所感が高い。2. 内面的同調傾向が高い人は、低い人に比べて心理的居場所感が高い。3. 表面的同調傾向が低い人は、高い人に比べて心理的居場所感が高い。

方法

1. 対象と手続き

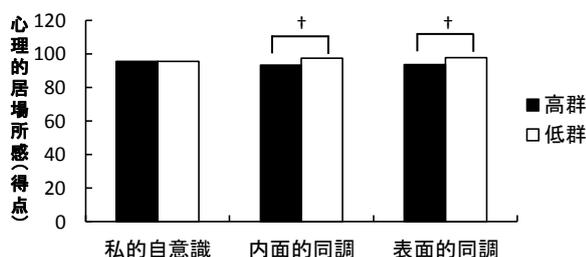
(1)調査対象者：広島県内の H 大学の心理学系の学科に所属している学生 185 名に調査を行った。有効回答者は 172 名(男性 83 名, 女性 89 名)であった。(2)調査時期：2015 年 10 月下旬に行った。(3)調査手続き：先生方の協力を得て、講義の前後の時間を利用していただき、質問紙を配布した。

2. 使用尺度および質問内容

(1)基本的属性：学年, 年齢, 性別(2)心理的居場所感尺度(則定, 2005)24 項目, 5 件法(3)自意識尺度(菅原,1984)私的自意識 10 項目, 7 件法(4)同調行動尺度(葛西・松本, 2010)22 項目(内面的同調 12 項目, 表面的同調 10 項目), 5 件法

結果

私的自意識, 内面的同調, 表面的同調それぞれの高群と低群における心理的居場所感の得点の違いについて検討するために, t 検定を行った。



** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

図1 各因子の高群, 低群による心理的居場所感の比較

その結果, 図 1 から, 私的自意識の高群と低群との間に心理的居場所感の得点の有意な差は見られなかった($t(170) = .012$, $p = n.s.$)。

また, 内面的同調の低群は高群に比べ, 心理的居場所感が高い得点を示し, 有意傾向が見られた($t(170) = 1.79$, $p < .10$)。

さらに, 表面的同調の低群は高群に比べ, 心理的居場所感が高い得点を示し, 有意傾向が見られた($t(170) = 1.70$, $p < .10$)。

考察

まず, 仮説 1 は棄却された。仮説 1 が支持されなかった理由として, 私的自意識以外の他の要因が関係していると考えられる。

また, 結果から, 私的自意識が高い人であっても, 自分の気持ちに正直になるあまり友人と気まづくなったりするため, 心理的居場所感が得られにくいと考えられる。

次に, 仮説 2 は棄却された。仮説 2 が支持されなかった理由として, 自分の内面を開示するようなかかわりかたを回避する, 現代青年の友人関係の特徴が考えられる。

また, 結果から, 内面的同調であっても, 友人に同調しているということ自体が, ストレスになっており, 心理的居場所感が得られにくいと考えられる。

次に, 仮説 3 は一部支持されたと言える。結果から, 表面的同調傾向が低い人は, 無理に相手の友人に合わせないため, 高い人に比べ, 心理的居場所感が高いと考えられる。

仮説 2, 3 の検討の結果から, 同調をせず, 自分の考えに基づいて行動する人の方が, 同調する人よりも心理的居場所感をより感じるようになると思われる。